

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I. その人らしい暮らしを支える

(1) ケアマネジメント

(2) 日々の支援

(3) 生活環境づくり

(4) 健康を維持するための支援

II. 家族との支え合い

III. 地域との支え合い

IV. より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 11 月 15 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 15名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	6名	

※事業所記入

事業所番号	3870500422
事業所名	グループホーム「むつみの家」
(ユニット名)	2棟
記入者(管理者)	
氏名	山下 龍二
自己評価作成日	令和 4 年 10 月 29 日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】</p> <p>のんびり 楽しく いっしょに</p> <p>私たちは、家族地域の人たちと共に入居者様と歩んできた道のりを大切にこれからの生活を支援致します</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】</p> <p>①チームケアを大切にして行く為、月1回以上の部署会を行っていく。 ・毎月1回の部署会を実施出来ている。 ・しかし、コロナ禍で実施が出来なかった月もあった。 ②コロナ禍における利用者の生活支援の充実を図る。 ・個別やユニット別に外出やレクリエーションを実施することができた。 ・感染対策を行いながら、個性を重視したケアをおこなえたケースもある。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】</p> <p>母体は医療法人で、医療体制が整備されているほか、系列法人では、多くの福祉施設やグループホームなどの展開している。事業所周辺には、のどかな風景が広がり、「のんびり、楽しく、いっしょに」という事業所の理念のもとに、全ての職員が一丸となって、利用者がのんびりと楽しみのある生活が送れるよう支援している。行動力ある看護師の資格を持つ専門知識豊かな管理者や担当職員を中心に、利用者一人ひとりのこれまでの暮らしや現状などを把握して、希望や意向が叶えられるようなケアを実践している。日々の生活支援の中で、職員は人生の先輩である利用者から学んで感動の笑顔を返すとともに、手伝ってもらった場合には、「ありがとうございました」などの感謝の気持ちを伝えている。さらに、事業所として、生活の中で利用者ができることを見つけ、役割や出番を担ってもらうことなどを実践している。コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられ、外出を控える利用者が増えているものの、日頃から事業所周辺を散歩したり、日当たりの良い中庭で外気浴をしたり、ドライブをして、季節の花を見に行くなど、利用者が満足でき、気分転換が図れるよう支援している。コロナ禍の収束後には、「いろいろなチャレンジをしたい」と願う管理者や職員の声が聞かれた。</p>
---	--	---

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	◎	入居時に本人の意向を確認し、ケアプランに取り入れている。また本人の性格や生活状況を把握する為、日々の中でコミュニケーションを取っている。	◎	/	◎	入居時に、職員は利用者や家族から、思いや暮らし方の希望、意向などの聞き取りをしている。また、日々の生活の中で、職員は利用者の会話から思いなどを聞き取るとともに、表情やしぐさから、思いをくみ取るよう努めている。さらに、聞き取りをした情報は、フェイスシートなどに記録して、職員間で共有している。
b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	◎	日常生活の中で本人の様子や発言、表情を観察し、気持ちをくみ取れる様、努力している。	/	/	/			
c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	◎	ケアプランの見直し時期や面会時等、本人の様子を報告し、その都度話し合っている。	/	/	/			
d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	◎	普段から本人が発した言葉は記録に残し、申し送り職員間で話し合っている。	/	/	/			
e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	◎	職員の思いや感じ方により気持ちのくみ取り方は違いますが、その都度皆で発言しあい、少しでも本人の思いに近づける様、努力している。	/	/	/			
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	◎	入居時に利用者やご家族から生活歴や性格、身体精神状況等の情報を収集し、フェースシートを活用し記入している。	/	/	○	入居時に、アセスメントシートを活用して、職員は利用者や家族から、生活歴やこだわり、生活環境などの聞き取りをしている。以前利用していた介護サービス事業者との関係者や介護支援専門員から情報を聞くとともに、病院の関係者からサマリーなどの情報提供を受けるなど、職員は関係者からより多くの情報が収集できるよう努めている。また、把握した情報はアセスメントシートなどに記録を残すとともに、日々の生活の中で、新たに得られた情報は、シートに追記を行うなど、職員間で情報を共有している。
b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	◎	アセスメント用紙を活用し、本人が得意な事や行える事の把握をしている。又、本人の言動を見て把握するよう努めている。	/	/	/			
c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に務めている。(生活環境・職員のかかわり等)	◎	週間表を活用し、表をみればその方の状況や変化が解りやすい様に記入している。	/	/	/			
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	◎	日常生活の中で、なにげなく発する言葉に耳を傾け、検討している。	/	/	○	事業所では、常に利用者の視点に立って考えるとともに、担当職員を中心に、利用者一人ひとりの意見に耳を傾けながら、より良いサービスが提供できるよう検討している。また、入居前の利用者の習慣を継続しながら、本人らしい生活が送れるような支援にも取り組んでいる。
b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	◎	毎月ケアプランのモニタリングを行っており、課題を明らかにし、更に検討している。	/	/	/			
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	本人の意向を尋ねているが、上手く表現ができない方は、職員が日々の状態や発言により気持ちをくみ取り考えている。	/	/	/	担当職員が、事前に利用者から意見を聞くとともに、医師などの関係者から指示やアドバイスをもらっている。また、事前に把握したアセスメント情報などをもとに、家族のほか、担当職員や計画作成担当者、看護師、管理栄養士などの多職種の関係者を交えて、カンファレンスを活用して詳細に話し合い、介護計画を作成している。コロナ禍において、家族等が参加できない場合には、事前に意見を聞くこともある。さらに、専門職種の意見のほか、利用者や家族の意見を反映した、より良い計画となるよう努めている。
b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	会議には職員とご家族のみで、本人は参加する事はあまりない。可能な方は今後、参加を促していきたい。	◎	/	/			
c	重度の利用者に対して、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	できる限り本人の意向をくみ取る様、努力しているが、満足している様には見えない。	/	/	/			
d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	ご家族との協力体制はできているが、地域の方との協力は少ない。	/	/	/			

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	職員全員が内容を把握できる様、カルテにとじ、目を通せる様にしている。	/	/	/	事業所では、「カルテ」と呼ばれる利用者の個別ファイルに、介護計画と日々の介護記録を一緒に綴じて、全ての職員が利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握し、理解できるよう工夫されている。また、利用者毎の担当職員を配置して、バイタルチェック表などに日々の状態を記載するほか、担当職員が週間チェック表に介護計画に沿ったサービスの実施状況を記録して評価を残すことで、利用者の状態把握を行いながら、日々のより良い支援に繋げている。さらに、カルテや申し送りノートには、利用者の日々の暮らしの様子や支援内容のほか、職員の気づきや工夫、アイデアなどの詳細な記録を残すことができています。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	◎	毎月モニタリングを行っている。各担当者を決めておりその都度、変化や問題が起きた時は、日々の申し送りの中で話し合っている。	/	/	/	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	期間に応じて見直しを行っている。また、身体精神面の変化があった時にも見直ししている。	/	/	/	介護計画は、6か月に1回見直しをしている。入居直後には、暫定的な計画になっているため、利用者の様子等を観察しながら、1か月と3か月の頻度で計画の見直しをしている。また、担当職員が、日々の記録や週間ケアチェック表などの記録を踏まえて、月1回モニタリングを行い、利用者の現状を確認して記録に残している。さらに、入院や怪我などの急変が生じた場合には、その日の出勤職員と管理者で話し合い、新たな計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	毎月、モニタリングを行い記録している。	/	/	/	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	変化等あった時は、追加のプラン等を作成し、見直し作り直している。	/	/	/	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	毎月の部署会は、定期的に行っている。また、緊急案件際はその都度、その場にいる職員で話し合いをし、早急に対応している。	/	/	/	月1回部署会(ユニット会)を実施し、ユニット全体の課題確認やケアの方向性などを職員間で話し合いをしている。緊急案件のある場合には、その場にいる職員と管理者で話し合い、対応を決定している。また、勤務の都合上で、部署会や緊急のカンファレンスなどに参加できない職員には、申し送りノートを活用して、情報を伝達している。今後、部署会等に職員が参加しやすいように、事前に開催日時を決定したり、月の開催日を固定したり、参加できない職員には事前に意見を聞くなど、開催方法を職員間で話し合い、有意義な会議開催となることを期待したい。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	会議中とはなるべく全ての職員が発言できる様にしている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	○	その日の出勤の職員のみで行うことが多い。参加できない職員には、申し送りノートを使用し、伝達している。	/	/	/	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	カルテに重要な内容を記入し、全員に申し送る内容は青枠や赤枠で囲み、目立つ様にしている。	◎	/	○	勤務時間の違う職員との交代時等に、1日3回の申し送りを実施し、職員間で伝達漏れがないよう工夫している。特に伝えたい利用者の様子や管理者からの重要な伝達事項は、申し送りノートを活用して、確実な情報共有に繋げている。また、申し送りノートの記録は、医師からの指示を赤枠で囲むほか、看護師や介護職員からの指示や決定事項を青枠で囲むなどの使い分けを行い、職員が確認しやすいよう工夫されている。さらに、出勤時等に、申し送りノートを確認した職員は、サインや押印をしている。

(2) 日々の支援

9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	希望やその日したい事の把握をし、できる限り沿うように努力しているが、その日の業務や他の入居者さんの状態により、行えない時がある。	/	/	/	○ 起床時や入浴後の着る衣類、家事の手伝い、入浴の有無など、様々な場面で職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえるよう支援している。事業所では、日課に沿った生活を基本として支援しているものの、利用者一人ひとりの気持ちに合わせて、レクリエーションや休息などの活動を選ぶことができるようにしている。また、法人・事業所として、認知症ケアの技法である「ユマニチュード」を活用した利用者とのコミュニケーションなどを実践しており、職員は必ず目線に合わせて、利用者や会話を実践している。さらに、会話の中で、職員は明るい気持ちになれるような声かけをすするとともに、時には利用者に触れて寄り添いながら、利用者がポジティブな気持ちで、日々の生活を送ることができるよう心掛けた支援にも努めている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくる。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	基本的に自ら決定してもらっているが、その時の状況によりこちらの業務に合わせてもらっている時もある。	/	/	/	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのベースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	◎	1日の日課が決まっており、それに基づいているが本人の希望や意見も取り入れ、全てにおいて無理じいはしていない。個別対応している。	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	◎	本人のポジティブワードを知り活用し、笑顔や笑いを引き出す様、努力している。	/	/	/	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	表情や身体精神状況を把握し、思いをくみ取る様、努力している。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、自立たずさげない言葉かけや対応等)	△	研修等で人権や尊厳については、個々に学び、常に意識しながら取り組んでいる。声掛け等は職員によっては、大声で伝えている事もあるため、改善しなければならない。	◎	○	○	法人内研修で、倫理や人権、尊厳などを学び、職員の理解促進に努めている。要介護度の重度化や認知症の進行に伴い、意思疎通が難しい利用者も増えてきており、日々職員は利用者へ気を配りながら、意識した対応をしている。また、居室への入室時は、職員はノックを3回してから入室するとともに、それでも気づかない場合には、ベッドサイドでノックするなどの対応をしている。不在時にも、必ず事前に職員から利用者へ声をかけ、入室する理由を伝え、了承を得た上で入室することができている。さらに、居室から退出する際には、「お邪魔しました、また来るね」などの声をかけ、職員は再会を約束するなど、ユマニチュードなどの技法がマニュアル化され、配慮された取り組みが行われている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	個別にタイミングを見ながら行っている。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	ノックと声掛けを行い、了解を得てから入室している。	/	/	◎	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	職員としての守秘義務を守り、業務している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	常に感謝の言葉を表現しながら関わりを持っている。	/	/	/	職員は、利用者同士の関係性や性格を把握するとともに、職員間で話し合いをして配慮を考慮するなど、未然にトラブルが起こらないような支援に努めている。また、言い合いなどのトラブルが発生した場合には、早期に職員が間に入ってフォローすることもあるが、ムードメーカー的な利用者が、他の利用者の間に入ることで、みんなが穏やかな笑顔になって解決する場面が見られるなど、職員が助けられることもある。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	お互いが尊重できる様に関わりを持てる様、配慮している。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらおう場面をつくる等)。	◎	日頃から利用者同士の関係性をよく観察しながら、距離を調整している。	/	/	/	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	トラブルの可能性がありそうな時は、職員が間に入り、相手が気分を害さない様に配慮している。	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	◎	入居時にも確認し、入所してからご家族や本人との会話の中で馴染みの場所や人間関係について尋ねたり確認している。	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしていた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	基本的にご家族や本人の希望に添い面会は制限はない。(現在はコロナの影響にて制限がある)入所後は、馴染みの場所に行ったり、知人との付き合いは途切れていって方が多い。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	本人の希望は把握しているが、業務の都合等で希望に添えない時もある。	/	△	○	コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられ、外出できる機会は減少している。全ての利用者の外出希望に沿うことは難しいが、敷地内や事業所周辺を散歩したり、日当たりの良い中庭のベンチに座って日光浴をしたり、お茶を飲むなど、職員は利用者が気分転換が図れるよう支援している。また、感染状況を見計らいながら、小グループに分かれて、初詣に出かけたり、季節の花などを見に行ったりできるよう支援している。さらに、屋外の堀にみかんなどの餌を置き、野鳥に餌をやるのを楽しみにしている利用者もいる。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	ご家族のみで、その他の支援や協力は行っていない。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	◎	個々に研修を受けたり、普段、認知症の方と関わる事で学びの場となっている。利用者の状態変化や症状が悪くなる原因を探りサポートしている。	/	/	/	法人・事業所として、認知症ケアの技法である「ユマニチュード」を活用した利用者とのコミュニケーションなどを実践しており、職員は研修等で学び、認知症状などを理解している。また、日々の生活動作の中で、職員は利用者一人ひとりの残存能力を見極めて、歩行や運動のほか、家事や清掃などの生活リハビリを取り入れ、心身機能の維持に努めている。さらに、利用者自身でできることは自分でしてもらい、職員は時間がかかっても、見守りや待つ介護に努めている。時には、新人職員が利用者の動きを待たずに、つい手を出して支援してしまうことも見られるため、ベテランの職員がフォローをしながら、時間をかけて見守ることの大切さを伝えている。中には、「自力で排泄がしたい」などの利用者の意向に沿って、家族と話し合いをしながら、職員がベッドにL字柵を取り付けて、居室にポータブルトイレを設置するなどの支援をしたこともある。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	◎	日常生活の中で得意であった事を勧め、目標にして身体機能維持を図っている。その方の症状に合わせて対応している。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	◎	さりげなく声掛けし、なるべく自力で行って、達成感が味わえる様、サポートしている。	/	◎	○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	データベース、フェースシートやご家族からの情報を基に、本人の興味のある事、得意な事等を知り、また普段の本人の言葉や行動からくみ取り、その人にとって何が楽しくてどんな役割が良いのか探っている。	/	/	/	モップがけや洗濯物たたみ、テーブル拭き、調理の手伝い、壁面の飾り付けの作成など、日々の生活の中で、職員は利用者へ声をかけて、役割を担ってもらえるよう支援している。また、職員は利用者が進んで、楽しみながらできる役割を模索するとともに、できる時に洗濯物たたみや清掃などを手伝ってもらえるよう声をかけている。中には、季節の飾り付けを作成する際に、色をぬる利用者があるなど、些細なことでもできる役割や出番づくりにも取り組んでいる。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	△	残された機能を把握しながら無理なく、行える様に取り組んでいる。ホーム外での取り組みはほとんど行っていない。	/	○	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つと捉え、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	◎	本人の意見を聞きながら選んだり勧めたりして着用してもらっている。				起床時に、着替えや髭剃りなどのできることを利用者自身にしてもらい、職員は見守りやできない部分のサポートをしている。また、食べこぼしなどの汚れが見られた場合には、職員が利用者に声をかけ、さりげなくフォローをしている。さらに、常に履物が乾燥した状態を保てるように、職員は手間を惜しまず、上履きなどを手入れするなどの対応をしている。加えて、重度な状態の利用者にも、好みの服のデザインや色などの希望に沿うとともに、家族と相談しながら着脱をしやすい物を選んでもらうなど、本人らしさが保てるよう支援している。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるよう支援している。	○	入居前から使用していた物、ご家族の選んだ物を勧めている。髪型は本人と美容師さんと相談している。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	◎	職員がアドバイスしながら本人が納得しているか観察し、支援している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しむよう支援している。	◎	外出時は本人の希望を聞きながら決める様になっている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくなりカバしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	◎	本人のプライドに配慮した対応を心掛けている。	◎	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	◎	コロナ予防の為、本人にも説明し対応している。施設指定の理美容を利用している。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	◎	服装は本人の状態に合わせて脱着しやすいものを、ご家族と相談しながら購入実施している。			○	
		h	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	個々に合わせ、楽しく食事ができるように支援している。				
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	個々に合わせ、楽しく食事ができるように支援している。				事業所では、管理栄養士が立てた配食サービスを活用して、業者から食材が配達され、ユニット内で炊飯と汁物作り、アレンジした盛り付けを行い、利用者に食事を提供している。利用者には、食器の準備や後片付けなど、できることを手伝ってもらっている。事業所では、干し柿づくりなどをすることもあり、利用者に柿や栗の皮むきなどの下処理を手伝ってもらうなど、職員は利用者から教わることも多い。現在、アレルギーのある利用者はいないが、苦手な食材などがある場合には、代替えの食材を用意するなどの対応をしている。食器類は、入居時に使い慣れた物を持参してもらうほか、利用者の状態に合わせて、事業所で用意した使いやすい物を使用している。年を重ねて、多くの利用者の視力低下が見られ、食器とごはんなどの食材の色が同じになる物は使用せずに、食器は少し重さのある安定して落ち着いた物を使用している。食事の際に、職員が希望すれば、利用者と同じ物を食べることができるものの、コロナ禍の感染対策もあり、職員は見守りやサポートを行い、現在は別々に食事を摂っている。また、利用者の状態に合わせて、刻み食やミキサー食などに対応するとともに、職員はミキサー食などにした後に、もう一度食材の形に作り直すなど、少しでも楽しい食事が美味しく味わえるよう工夫している。さらに、献立や栄養バランスは業者の管理栄養士が管理しているが、事業所では、利用者の嗜好や行事に合わせてメニューの変更などを業者に伝えて対応してもらうこともあり、食事は利用者により好評を得ている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	基本的には調理された物を提供しているが、季節や行事に合わせて、利用者の希望に沿っている。今はコロナにより買い物は行けてない。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	調理済みの食材を使用しているが、下処理等できることは手伝ってもらっている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	データベース、フェースシート等情報に基づき、本人にも確認しながら職員が全員共有している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいのよいもの等を取り入れている。	◎	ご家族からの聞き取りでアレルギーなどは把握している。旬の食材も取り入れた物や昔懐かしい物も取り入れている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法として、おいしいような盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	利用者に合わせた形態を取り入れながらも彩りや器にも配慮し提供している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	◎	施設内の物を中心に使いやすい物を提供し、都度対応している。			◎	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	コロナウィルスの感染対策の為、一緒に食事はできていないが、側で見守りながら都度対応している。			○	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	リビングにキッチンがあるため、食材の話などしながら次に食べたい物など聞かせてもらっている。	◎		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	毎日の摂取量の記載や管理栄養士ともカンファレンスしながらバランスの確保に努めている。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	管理栄養士と職員とのカンファレンスにて、その人に合った物を選び、カロリーの調整や水分摂取をってもらう様取り組んでいる。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	◎	配食サービスで調理しているメニューであるため、栄養バランスに配慮した食事提供をし、母体病棟の管理栄養士ともカンファレンスしている。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	感染委員、管理医師の指示を受けながら衛生管理に取組み、毎日、次亜塩素酸を用いて消毒を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	口腔内の細菌を出来るだけ減少させ、常に清潔な口内環境を整える事が、非常に重要だということまで理解している。				歯科医等から指導やアドバイスをもらい、職員は口腔ケアの重要性を理解している。毎食後に、職員は利用者へ声をかけ、口腔ケアを実施している。必要に応じて、職員は見守りや磨き残しなどのサポートをしている。自分で歯磨きをしている利用者を含めて、職員は全ての利用者の口腔内の様子の確認に努めている。また、訪問歯科などの受診の際に、歯科医から口腔内の状況や気づいたこと、指導などのアドバイスをもらい、職員は必ず記録を残している。さらに、歯ぐきの腫れや義歯の不調などが見られた場合のほか、利用者から訴えがあった場合には、早期の歯科受診や往診に繋げている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	訪問歯科を利用し、口腔内をチェックしたり、口腔ケア時、義歯の状態をチェックしている。			◎	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	訪問歯科利用時、医師から指導して頂き日常の支援に活かしている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	本人が出来る所までして頂き、磨き残しをチェックし、清潔に洗い、ポリドントで毎日消毒している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	○	口の中の汚れや臭いが生じた時は、原因を調べ対応したり、訪問歯科を利用し医師に診て頂き、原因をつきとめている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	理解している。すぐに紙パンツではなく、様子を見ながら使用を検討している。				事業所では、利用者がトイレで排泄することを基本として、身体状況が可能な限り、トイレでの排泄支援に努めている。職員は、利用者一人ひとりの排泄パターンを把握し、声かけやトイレ誘導を行うことで、失敗のない排泄支援に取り組んでいる。また、重度の利用者にも、必ず1日1回はトイレ誘導を行い、トイレで排泄できるよう支援している。さらに、紙パンツやパッドなどの排泄用品を使用する場合には、利用者の状態に合わせて、適切な排泄用品を話し合うとともに、利用者や家族の費用的な負担にもなるため、メーカーに問い合わせをしながら、家族等に確認の上で使用している。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	◎	管理医師や看護師に便秘の原因や及ぼす影響について話し理解に努めている。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	毎日週間表に記録し把握している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	トイレやPTイレにて用を足すことを基本としている。紙パンツやパッドを使用しているが、その人に合わせてトイレ誘導を行い、排泄を促している。	◎		○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	排泄状態を観察し、要因や誘因を探り、管理医師や看護師に相談し改善に向けた取り組みを行っている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	◎	定期的にトイレ誘導したり、本人のタイミングに合わせて声掛けや誘導を行っている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	△	基本、職員の方で決めているがご家族にはどういった物を使用しているか報告している。本人の好みの選択はできていない。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	◎	状態に合わせて個別に使い分け、又、パットの水分量や大きさ等、個々に使い分けしている。				
i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	◎	時間帯に分けて飲むヨーグルト、牛乳、乳酸菌飲料を提供したり、ラジオ体操も日課に取り入れ、自然排便を促す取り組みを行っている。						
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	△	入浴する日や時間帯、長さ、回数は職員が決めている。拒否した時は、時間をおいて再度、声掛けしたり、清拭を行っている。	◎		○	週2〜3回、夕方の時間帯を活用して、利用者が入浴できるよう支援している。また、利用者の希望に応じて、入浴の順番や長さ、湯の温度など、職員は柔軟な調整や対応をしている。さらに、冬至の日にはゆず湯をするなど、利用者が心地良く、ゆったりとした入浴時間が感じられるような工夫をしている。加えて、家族は利用者が寛ぎながら、満足して気持ち良く入浴できるように、安心をしている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	◎	個別に入浴し、会話しながらくつろいで頂ける様、支援している。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	本人が出来る所はして頂き、浴槽には滑り止めマットを使用し安全に入浴している。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ちよく入浴できるよう工夫している。	◎	本人の了解を得ながら、入浴支援を行っている。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	バイタル測定を行い、入浴前後で一般状態の観察を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	専用の表に時間毎に記入し把握している。	/	/	/	事業所には、医師の指示により眠剤などを服薬している利用者もいる。職員は、利用者一人ひとりに生活リズムに合わせて昼間の離床を促したり、日中の散歩や体操などの活動を増やしたりするなど、利用者が夜間に良眠できるよう支援している。また、夜間の眠れる環境やタイミングは、利用者一人ひとりが異なっていることもあり、職員の日々の観察力を活かしながら、上手な声かけや過ごし方を工夫するなどの支援が行われている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	◎	眠れない方については、その原因を探り、管理医師や看護師に相談し、改善できる様、取り組んでいる。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	日中の活動の過ごし方等の内容は検討している。又、医師とも相談しながら支援を行っている。	/	/	○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	本人のペースに合わせて過ごして頂いている。飲食時以外は、自由にして頂いている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	本人の希望があれば応じている。手紙のやり取りも自由にできる。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	職員が手助けをしながら支援を行っている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	◎	自由に電話できるよう、配慮している。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのまませず音信がとれるように工夫している。	◎	本人へ手渡している。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	本人が希望した時は、職員が間に入りご家族に協力を依頼している。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解はしているが事業所として認めていない。	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	○	職員を通じて、慣れ親しんだ店で協力を得られている。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	×	事業所としては認めていない為、できていない。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	×	事業所としては認めていない旨をご家族に伝えている。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	入居契約時に管理方法等説明し、理解を得ている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	◎	職員間で相談し、様々なサービスができる様取り組んでいる。	◎	/	○	コロナ禍において、事業所には外出や面会などの制限が設けられているものの、感染状況を見計らいながら、感染対策を徹底した上で、利用者や家族から外出などの要望が出された場合には、柔軟に対応をしている。また、職員が病院受診の同行支援をすることもある。さらに、家族から、「面会ができない中で、利用者の日々の様子が分かりにくい」という要望が聞かれ、職員は利用者個人の写真集を作成して、送付するなどの対応もしている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	季節の花や野菜を植え、明るい雰囲気になる様工夫している。	◎	◎	◎	事業所周辺はのどかな風景が広がっているほか、門を入ると平屋の建物が立ち並び、ベンチも置かれ、居心地の良さを感じる。また、毎日利用者が玄関周りの清掃をするほか、ガーデニングの得意な職員が、庭や花壇の整備を行い、夏にはひまわりやホウキ草、冬には水仙などが植えられ、親しみやすさがある。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	◎	共有スペースは家庭的な空間になっており、居心地良く居られている。	◎	○	○	リビングには、写真やカレンダー、季節感のある飾り付けが行われているほか、窓から四季折々の風景も眺められ、利用者や来訪者は季節を感じることができる。窓の多い事業所内は明るく、天窓も設置され、自然の採光も差し込んでいる。また、利用者はソファなどに腰をかけながら、自由に寛ぐことができる。毎日、利用者と一緒に広いリビングなどの清掃や消毒などを行い、物を足もとに極力置かず、清潔な快適な空間づくりが行われている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	消臭剤や空気清浄機を使用し、掃除も毎日行っている。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	季節に合わせたレクリエーションや旬の食材を使い、工夫している。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	居室は個室になっており、自由に入出りできる。				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	◎	入居時に普段使用している家具や服等を持ち込み、居心地良く過ごせる様になっている。	◎		◎	居室には、エアコンとベッドが備え付けられている。また、利用者や家族と相談を行い、家具や生活用品を持ち込むこともできる。さらに、愛読書を持ち込んだり、家族の写真を壁に飾ったり、賞状を置いている利用者があるなど、職員は利用者一人ひとりに合わせた快適な空間づくりを支援している。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	表札や場所の明記をすることで、混乱を防げている。			○	浴室の入り口には暖簾を吊るしたり、居室の入り口には、大きく名前を表示したりするなど、利用者が迷わず、生活を送れるよう支援している。1ユニットのみ、居室内にトイレと洗面台が備え付けられ、生活を送りやすい空間づくりも行われている。また、事業所内で迷い、居室を間違える利用者にも、職員は傷つけないように、さりげなく誘導するなどの対応をしている。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	◎	設置はしているが、危険が伴うものは職員の見守りのもと、都度使用してもらっている。				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていること、異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけることなく済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	○	理解している。離棟する場合は、職員が付添い、見守りしている。	◎	◎	◎	職員は研修等で学び、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。日中に、事業所では玄関の施錠をしておらず、夜間のみ防犯のため、施錠をしている。中には、帰宅願望のある利用者が、屋外に出ることもあるが、職員は利用者につき添うとともに、事業所周辺を散策したり、別の職員がちょうど車で出会うように声をかけて、ドライブしながら事業所まで帰ったりするなど、利用者を制止しないような支援を心掛けている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	入居時に説明し、理解を得ている。				
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	◎	入居前サマリーやフェイスシート、ご家族からの情報にて把握に努めている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	毎日のバイタル測定、観察により、早期発見に努め、記録に残している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等いつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	変化異常サインはすぐに管理医師、看護職に連絡し、早めの受診に対応している。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	希望に沿える様、連携を取り支援している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	希望の病院との関係は築けている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	受診の結果はご家族に伝え、情報を共有し、必要な時は相談している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院時、サマリーを渡し、特に気をつけることや注意すべきことなど、口頭で伝えている。	/	/	/	
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	管理者が病院へ連絡し、症状など担当者に聞いている。	/	/	/	
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。		施設内の看護師にその都度、報告・相談し、かかりつけ医にも相談している。	/	/	/	
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	施設内に看護師が配属されており、担当医、当直医とも24時間連絡がとれる。	/	/	/	
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	毎日、バイタルチェックを行い、いつもと違う変化がある時は、看護師に相談、報告し早めの対応をするようにしている。	/	/	/	
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	全てを理解しているわけではないが、わからないことは都度、調べるようにし、本人の状態、経過などは、ご家族、医師、看護師に報告している。	/	/	/	
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	服薬カードを作成し、声掛けしたり、間違いないよう取り組んでいる。	/	/	/	
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	週間表、カルテを活用し、日々の申し送りで確認し、情報共有している。	/	/	/	
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入居時にもご家族と話し合い、状態が変化した段階ごとにご家族へ報告相談し、方向性を検討している。	/	/	/	事業所には、「利用者が重度化した場合における対応に係る指針」があり、入居時に、職員は利用者や家族に対応できることを説明している。また、事業所では看取り支援を行っており、入居の際にも説明をしている。さらに、利用者の状態が重度化した場合には、家族や医師を交えて関係者で話し合い、方針を共有している。加えて、法人・事業所として、転院などの相談支援体制が整備され、事業所対応できなくなった場合に、利用者は病院や系列の特別養護老人ホームなどに転院をしている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	管理医師と情報を共有しながら、協力医療機関との連携を行っている。	◎	/	○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	職員の力量を判断しながら、どこまでの支援が出来るか判断している。	/	/	/	
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	ご家族へは入居時及びその都度、事業所の出来る事、出来ない事を説明し、理解を求めている。	/	/	/	
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	協力医療機関と連携をしながら、今後の変化に対応する準備を話し合っている。	/	/	/	
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	◎	ご家族の声に耳を傾けながら、個別に取り組んでいる。	/	/	/	
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	感染委員会に参加し、情報を得ている。また、感染予防の研修会や医療安全の研修会にも参加している。	/	/	/	
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	◎	研修会に定期的に参加している。コロナ対策の勉強会などを頻回に行っている。	/	/	/	
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	◎	母体病院からの最新情報は、グループラインにて、職員全員共有している。	/	/	/	
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	職員の手洗いやうがいは徹底して行っている。利用者や来訪者の手指消毒、検温、健康状態調査を徹底して行っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
II. 家族との支え合い										
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	◎	入居者の些細なこともでも報告し、現状を共有し、信頼関係が築けるよう努力している。				コロナ禍以前は、家族に敬老会などの行事案内を送付して、多くの家族に参加協力してもらうこともできていたが、現在は開催を自粛している。コロナ禍において、事業所には面会などの制限が設けられ、家族が来訪できる機会は減少しているものの、窓越しの面会に対応するほか、SNSのLINE機能を活用して、オンライン面会にも対応をしている。また、地域の感染状況を見計らいながら、利用者や家族から要望が出された場合には、抗原検査した上で、外出するなどの対応をすることもある。利用者毎の担当職員が、来訪時や電話連絡時を活用して、家族に利用者の様子を伝えるとともに、必需品や希望の品の買い物をお願いすることもあつた。さらに、敬老会や誕生会などの行事は、年4回発行する「むつみ新聞」を活用して、様子を伝えている。加えて、人事異動等で担当職員が変わる場合には、個別に家族に連絡をしている。	
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	×	現在、コロナの為行っていない。	○		△		
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	担当者が窓口となり、面会時や電話などで近況を報告し、意見を伺っている。ライン登録などを家族にお願いし、ラインで動画、写真など送付する予定あり。	◎		○		
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	今のご本人の状態をその都度、報告し、対応の仕方等話し合い、協力を得ている。					
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	△	運営上の事柄、出来事などは文章で報告しているが、職員の異動等は伝えていない。		○			○
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	リスクについては都度、説明し理解を得て対応等、検討している。					
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	基本的には担当者が窓口になりつつも、家族の面会時、来棟時に都度、近況を報告し、意見を伺っている。					○
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	○	ご家族に来棟していただき、その都度、説明し理解を得ている。					
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	入居時に退居時の条件について説明している。納得のいく退居になるよう説明し、行先も相談に応じている。					
III. 地域との支え合い										
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域、事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	運営推進会議議事録を送付し、理解を得るよう努めている。		○		事業所として自治会に入会し、ごみ当番や地域清掃などに協力をしている。以前には、利用者を探すために、町内放送で呼びかけの協力をしてもらうなど、地域との連携を図ることができている。また、可能な範囲で自治会行事や会合に参加協力しているものの、コロナ禍において、参加できる行事等が縮小されるとともに、自治会長の交代があり、以前に比べて連携が難しい状況となっている。さらに、職員等は近隣住民に挨拶を欠かさず行うなどの連携を図ることを継続している。コロナ禍の収束後は、地域活動や行事へ利用者と一緒に参加するなど、管理者は、「改めて地域の事業所として関係を深めていきたい」と考えている。	
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	地域のゴミ当番、清掃活動、子供太鼓台、保育園行事、地区運動会に定期的に参加。(今はコロナの為、参加できていない)		○	○		
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	日常的かかわりがないので、増えていない。					
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	△	用事のある時以外は、立ち寄ることはない。					
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらつたなど、日常的なおつきあいをしている。	△	日常的に挨拶程度であるが、行事のときはお付き合いが出来ている。					
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	×	定期的にボランティアの方に来ていただいていたが、コロナ感染予防の為、中止にしている。					
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	○	周辺施設の工事車両の駐車場の協力や行事協力を可能な限り行っている。					

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	運営推進会議議事録をご家族や地域の方へ行政に送り対応している。	○	/	○	コロナ禍において、運営推進会議は全て書面開催となっている。書類を会議の参加メンバーや全ての家族に送付するとともに、返信用封筒を同封して意見を返信してもらうなど、事業所として一方的な発信とならないよう心掛けている。また、返信された意見を議事録として取りまとめ、回答をするなどの対応を行い、再度会議の参加メンバーに報告をしている。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実態、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	◎	出された意見や提案書は話し合い、日々の取り組みやサービス向上に活かしている。	/	○	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	現在は、会議自体を集合形式では行っていない為、同じメンバーとなる事が多い	/	/	○	
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	毎朝、唱和し、認識するようにしていたが、現在、感染症対策の為、唱和していない。	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	利用者家族には、入居時に伝えているが、地域の方には伝えられない。	○	○	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	法人内において、必須研修と年数に応じた研修を実施している。	/	/	/	医師である法人の代表者は、月2回利用者の往診を兼ねて事業所に来訪があり、利用者や職員の様子を気にかけて、職員から話を聞くこともできている。また、管理者を通して、法人本部に職員の意見を伝えることもできる。さらに、職員は法人内研修を受講するとともに、勤務調整をして県地域密着型サービス協会の外部研修を受講できるようにするなど、職員のスキルアップに努めている。コロナ禍以前は、親睦会などの職員同士の交流を図ることができていたものの、現在は開催が自粛されている。加えて、定期的に管理者は、職員との個別面談を実施して、職員から意見を聞くとともに、職員のストレスチェックを実施して、適切な対応をとるなど、職員の意見を取り入れながら、働きやすい職場環境づくりに努めている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるように取り組んでいる。	○	母体病院の協力の研修を実施している。部署内には各部門から情報を共有している。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	△	ストレスチェックや個人面接を行い、職員の状況を把握しようと努めているが、各スタッフの満足度は低い。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)		地域密着型協会に加入している。研修の参加率は低かったが徐々に参加回数は増えている。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。		面接や業務改善は行いが、ストレスの軽減に至っていない。	◎	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	○	定期的に研修を実施している。職員が対応困惑している時は、臨時にミーティングを開き共有している。	/	/	○	法人として、虐待防止などのマニュアルを整備するとともに、重点的に倫理や虐待防止に取り組んでおり、年2回法人内研修で職員は学び、理解をしている。管理者は、部署会などの機会を活用して、虐待や不適切な言動が行われないように繰り返して啓発を行い、職員への注意喚起をしている。さらに、不適切な行為を発見した場合には、管理者へ報告するとともに、臨時のミーティングを実施して、話し合いなどの対応をしている。加えて、事業所として、虐待防止委員会を立ち上げて、月1回話し合いをするなど、職員が意識した適切な対応が行われるよう取り組んでいる。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	申し送りや部署会で、問題が起きる前には話し合っている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	日常的に職員の意見を聞き、介入している。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	委員会が設置され、定期的リモート研修を受けている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	ケースに応じて身体拘束にならないよう都度、話し合っている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	常にご家族に身体状況を報告し、ケアの取り組みやリスクについて話し合っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	△	研修会に参加出来ておらず、大まかに理解しているが、十分にわかっていない。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	地域包括支援センターや専門の機関と相談し、連携体制に努めている。成年後見人制度を利用している。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	△	基本方針は決まっているが、個別のケースのマニュアルに関しては、設備は出来ていない。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	定期的な訓練は受けていないが、研修は受けている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	◎	インシデントレポートを活用し、取り組んでいる。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	△	個別の入居者への情報とアセスメントにて、リスクマネジメントに取り組んでいる。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	マニュアルはあり、管理者や同法人の協力を得ながら取り組んでいる				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	上司に報告し、対応している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	納得いくまで話し合いつつ、単独での判断ではなく母体組織の窓口とも相談しながら対応している。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	運営推進会議議事録で個別に聞く機会をつくり、都度対応している。	○		○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞くほか、要望を察知して、可能な範囲で対応をしている。家族からは、来訪時や電話連絡時を活用して、利用者毎の担当職員が個別に意見を聞き、対応をしている。また、管理者は、職員から意見を聞くとともに、部署会や管理者との個別面談を通して、職員は運営に対する意見を伝えることもできる。出された意見は、必要に応じて、法人本部に伝えられるとともに、サービスの質の向上に繋げている。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	必要があれば都度、情報提供を行っている。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	部署会など行い、職員の意見や要望提案を直接聞いている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	△	個別に面接をする機会をつくり、職員の意見など聞いているが、なかなか時間が取れていない。			○	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	会議など通して、連携をとり、取り組んでいる。				外部評価の自己評価は、職員の意見を踏まえて、ユニット毎に作成をしている。また、サービスの評価結果は部署会などを活用して、職員に報告するとともに、目標達成に向けて取り組んでいる。さらに、運営推進会議を活用して、評価結果や目標達成計画等の報告をしている。コロナ禍の収束後には、目標達成計画の取組み状況のモニターを会議の参加メンバーや家族に呼びかけて、意見をもらうなど、サービスの質の向上に繋げられることが期待される。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	評価することによって、問題点を明らかにすることが出来ている。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	報告を行いつつ、今後の取組に協力をお願いしている。	○	○	○	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	△	事業所内でのみ話し合っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	△	火災対応マニュアルは作成している。	/	/	/	法人・事業所として、火災対応マニュアルなどを整備するとともに、年2回様々な場면을想定した避難訓練を実施している。また、市行政から事業所は福祉避難所に指定され、食料や水などの備蓄品を確保するとともに、十分な協議が行われ、連携を図ることができている。コロナ禍において、地域との繋がりが希薄になりつつあることから、自治会等との密な連携を行うなど、より一層の地域住民との連携協力体制を整え、さらなる利用者の安全確保の充実が図られることを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	年に2回、防災訓練を行っている。様々な状況を踏まえての訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	定期的に設備点検など行い、非常用食料も準備している。一部は、母体病院と合同の管理。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	運営推進会議などで話し合っている。明確な支援体制までには至っていない。	○	○	○	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	△	事業所のみで行っている。行政など協力を得て体制を図っている。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	○	新聞の発刊など行っている。母体病院の認知症ケアに関する研修等、実践報告など行っている。	/	/	/	事業所には、相談に訪れる地域住民がおり、快く対応をしている。事業所として、困りごとが発生した場合には、市行政や他のグループホームなどと連携を図るなど、良好な関係を築くことができている。また、市行政から、介護サービス相談員を受け入れるなどの対応もしている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	面会が出来る時は、面会で相談ののったり出来るが、出来ない時は、電話で相談ののっている。	/	○	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	△	コロナ禍の為、出来ていない。現在は、感染対策の為、解放されていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	現在は受け入れていない。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	×	地域の活動に出来る限り参加したいが、あまり出来ていない。	/	/	○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I. その人らしい暮らしを支える

(1) ケアマネジメント

(2) 日々の支援

(3) 生活環境づくり

(4) 健康を維持するための支援

II. 家族との支え合い

III. 地域との支え合い

IV. より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 11 月 15 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 15名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	6名	

※事業所記入

事業所番号	3870500422
事業所名	グループホーム「むつみの家」
(ユニット名)	3棟
記入者(管理者)	
氏名	山下 龍二
自己評価作成日	令和 4 年 10 月 29 日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】</p> <p>のんびり 楽しく いっしょに</p> <p>私たちは、家族地域の人たちと共に入居者様と歩んできた道のりを大切にこれからの生活を支援致します</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】</p> <p>①チームケアを大切にすべく、月1回以上の部署会を行っていく。 ・毎月1回の部署会を実施出来ている。 ・しかし、コロナ禍で実施が出来なかった月もあった。 ②コロナ禍における利用者の生活支援の充実を図る。 ・個別やユニット別に外出やレクリエーションを実施することができた。 ・感染対策を行いながら、個性を重視したケアをおこなえたケースもある。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】</p> <p>母体は医療法人で、医療体制が整備されているほか、系列法人では、多くの福祉施設やグループホームなどの展開している。事業所周辺には、のどかな風景が広がり、「のんびり、楽しく、いっしょに」という事業所の理念のもとに、全ての職員が一丸となって、利用者がのんびりと楽しみのある生活が送れるよう支援している。行動力ある看護師の資格を持つ専門知識豊かな管理者や担当職員を中心に、利用者一人ひとりのこれまでの暮らしや現状などを把握して、希望や意向が叶えられるようなケアを実践している。日々の生活支援の中で、職員は人生の先輩である利用者から学んで感動の笑顔を返すとともに、手伝ってもらった場合には、「ありがとうございました」などの感謝の気持ちを伝えている。さらに、事業所として、生活の中で利用者ができることを見つけ、役割や出番を担ってもらうことなどを実践している。コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられ、外出を控える利用者が増えているものの、日頃から事業所周辺を散歩したり、日当たりの良い中庭で外気浴をしたり、ドライブをして、季節の花を見に行くなど、利用者が満足でき、気分転換が図れるよう支援している。コロナ禍の収束後には、「いろいろなチャレンジをしたい」と願う管理者や職員の声が続々と聞かれた。</p>
---	--	--

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I. その人らしい暮らしを支える									
(1) ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	◎	本人のベースに合わせたケアを行っている。	◎	/	◎	入居時に、職員は利用者や家族から、思いや暮らし方の希望、意向などの聞き取りをしている。また、日々の生活の中で、職員は利用者の会話から思いなどを聞き取るとともに、表情やしぐさから、思いをくみ取るよう努めている。さらに、聞き取りをした情報は、フェイスシートなどに記録して、職員間で共有している。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	◎	その都度スタッフと意見を交換している。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	家族には伝えている。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	思いを汲み取りながら、都度共有化し記録をしている。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	◎	担当職員を中心に情報の整理を行いながら取り組んでいる。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	ケースによっては家族からの情報が不十分な時もあるが、本人からの情報を聞くようにしている。	/	/	○	入居時に、アセスメントシートを活用して、職員は利用者や家族から、生活歴やこだわり、生活環境などの聞き取りをしている。以前利用していた介護サービス事業所の関係者や介護支援専門員から情報を聞くとともに、病院の関係者からサマリーなどの情報提供を受けるなど、職員は関係者からより多くの情報が収集できるよう努めている。また、把握した情報はアセスメントシートなどに記録を残すとともに、日々の生活の中で、新たに得られた情報は、シートに追記を行うなど、職員間で情報を共有している。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	◎	個々のできることを探りながら、実行・評価・計画し取り組んでいる。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	◎	職員間で情報の共有ができている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	心掛けて努めているが、本人の視点となっているかは疑問である。	/	/	○	事業所では、常に利用者の視点に立って考えるとともに、担当職員を中心に、利用者一人ひとりの意見に耳を傾けながら、より良いサービスが提供できるよう検討している。また、入居前の利用者の習慣を継続しながら、本人らしい生活が送れるような支援にも取り組んでいる。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	課題があれば都度話し合い、明らかにしている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	△	ケースによっては家族や職員の意向が反映されることもある。	/	/	/	担当職員が、事前に利用者から意見を聞くとともに、医師などの関係者から指示やアドバイスをもらっている。また、事前に把握したアセスメント情報などをもとに、家族のほか、担当職員や計画作成担当者、看護師、管理栄養士などの多職種の関係者を交えて、カンファレンスを活用して詳細に話し合い、介護計画を作成している。コロナ禍において、家族等が参加できない場合には、事前に意見を聞くこともある。さらに、専門職種の意見のほか、利用者や家族の意見を反映した、より良い計画となるよう努めている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	×	本人不在で家族や職員で話し合うことが多い。	◎	/	○	
		c	重度の利用者に対して、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	個々により状況に沿えるように取り組んでいる。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	盛り込まれた内容になっていない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	ケアプランをファイルし共有している	/	/	/	事業所では、「カルテ」と呼ばれる利用者の個別ファイルに、介護計画と日々の介護記録と一緒に綴じて、全ての職員が利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握し、理解できるよう工夫されている。また、利用者毎の担当職員を配置して、バイタルチェック表などに日々の状態を記載するほか、担当職員が週間チェック表に介護計画に沿ったサービスの実施状況を記録して評価を残すことで、利用者の状態把握を行いながら、日々のより良い支援に繋げている。さらに、カルテや申し送りノートには、利用者の日々の暮らしの様子や支援内容のほか、職員の気づきや工夫、アイデアなどの詳細な記録を残すことができています。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	記録や申し送りはできているが不十分かもしれない。	/	/	/	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	各担当者が期間に応じて見直しを行っている。	/	/	/	介護計画は、6か月に1回見直しをしている。入居直後には、暫定的な計画になっているため、利用者の様子等を観察しながら、1か月と3か月の頻度で計画の見直しをしている。また、担当職員が、日々の記録や週間ケアチェック表などの記録を踏まえて、月1回モニタリングを行い、利用者の現状を確認して記録に残している。さらに、入院や怪我などの急変が生じた場合には、その日の出勤職員と管理者で話し合い、新たな計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	担当やモニタリングを行い現状把握に努めている。	/	/	/	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	変化が生じた際には、その都度報告し見直しを行っている。	/	/	/	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	△	緊急に対してその場にいるSTで話し合いはするが定期的には行っていない。	/	/	/	月1回部署会(ユニット会)を実施し、ユニット全体の課題確認やケアの方向性などを職員間で話し合いをしている。緊急案件のある場合には、その場にいる職員と管理者で話し合い、対応を決定している。また、勤務の都合上で、部署会や緊急のカンファレンスなどに参加できない職員には、申し送りノートを活用して、情報を伝達している。今後、部署会等に職員が参加しやすいように、事前に開催日時を決定したり、月の開催日を固定したり、参加できない職員には事前に意見を聞くなど、開催方法を職員間で話し合い、有意義な会議開催となることを期待したい。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	△	申し送りや部署会での話し合いは行っているが活発ではない。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	△	交代勤務のため工夫はしているが、全員参加はしていない。ノートを活用し意見を出している。	/	/	/	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	伝わるようにしているが、漏れもみられている。重要な事項は捺印し確認を取っている。	◎	/	勤務時間の違う職員の交代時等に、1日3回の申し送りを実施し、職員間で伝達漏れがないよう工夫している。特に伝えたい利用者の様子や管理者からの重要な伝達事項は、申し送りノートを活用して、確実な情報共有に繋げている。また、申し送りノートの記録は、医師からの指示を赤字で囲むほか、看護師や介護職員からの指示や決定事項を青枠を青枠で囲むなどの使い分けを行い、職員が確認しやすいよう工夫されている。さらに、出勤時等に、申し送りノートを確認した職員は、サインや押印をしている。	
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	努力はしているが、行えていないことが多い。	/	/	/	起床時や入浴後の着る衣類、家事の手伝い、入浴の有無など、様々な場面で職員は利用者へ声をかけて、自己決定してもらえるよう支援している。事業所では、日課に沿った生活を基本として支援しているものの、利用者一人ひとりの気持ちに合わせて、レクリエーションや休息などの活動を選ぶことができるようにしている。また、法人・事業所として、認知症ケアの技法である「ユマニチュード」を活用した利用者とのコミュニケーションなどを実践しており、職員は必ず目線を合わせて、利用者との会話を実践している。さらに、会話の中で、職員は明るい気持ちになれるような声かけをすするとともに、時には利用者に触れて寄り添いながら、利用者がポジティブな気持ちで、日々の生活を送ることができるよう心掛けた支援にも努めている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくらせている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	◎	できるときは本人に選んでもらう機会を作っている。	/	/	/	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	◎	できる範囲で個人の生活ペースに合わせた支援を努力している。	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	個人に合わせて本人が喜びそうな内容を声掛けし、雰囲気を作っている。	/	/	/	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	◎	表情や全身の反応を見ながら本人のペースに合わせて支援している。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	意識して行動できるように心がけている。	◎	○	○	法人内研修で、倫理や人権、尊厳などを学び、職員の理解促進に努めている。要介護度の重度化や認知症の進行に伴い、意思疎通が難しい利用者も増えてきており、日々職員は利用者へ気を配りながら、意識した対応をしている。また、居室への入室時に、職員はノックを3回してから入室するとともに、それでも気づかない場合には、ベッドサイドでノックするなどの対応をしている。不在時にも、必ず事前に職員から利用者へ声をかけ、入室する理由を伝え、了承を得た上で入室することができている。さらに、居室から退出する際には、「お邪魔しました、また来るね」などの声をかけ、職員は再会を約束するなど、ユマニチュードなどの技法がマニュアル化され、配慮された取り組みが行われている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	◎	各個人のプライバシーに配慮しながら介助している。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	居室に入るときは、ノックを行い利用者のプライバシーの場所であることを理解している。	/	/	/	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	記録の処理にはシュレッダーを使用し意識して取り組んでいる。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	生活の中で解らないことは人生の大先輩である利用者に教えてもらい、また必ず感謝の気持ちを伝えている。	/	/	/	職員は、利用者同士の関係性や性格を把握するとともに、職員間で話し合いをして配慮を考慮するなど、未然にトラブルが起こらないような支援に努めている。また、言い合いなどのトラブルが発生した場合には、早期に職員が間に入ってフォローすることもあるが、ムードメーカー的な利用者が、他の利用者の間に入ることで、みんなが穏やかな笑顔になって解決する場面が見られるなど、職員が助けられることもある。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	△	相互作用の大切さは感じているが、利用者の症状から難しいときがある。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者同士の人間関係を考慮しながら距離感の調整に努めている。	/	/	○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	共有スペースは特に利用者間の距離感を相性を見ながら調整している。	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	担当の職員を中心に家族や利用者本人から情報収集に努めている。	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	×	現在感染症対策のため外出や面会には制限をしている。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	現在感染症対策上、敷地外への外出は最小限となっている。	○	△	○	コロナ禍において、事業所には外出制限が設けられ、外出できる機会は減少している。全ての利用者の外出希望に沿うことは難しいが、敷地内や事業所周辺を散歩したり、日当たりの良い中庭のベンチに座って日光浴をしたり、お茶を飲むなど、職員は利用者が気分転換が図れるよう支援している。また、感染状況を見計らいながら、小グループに分かれて、初詣に出かけたり、季節の花などを見に行ったりできるよう支援している。さらに、屋外の堀にみかんなどの餌を置き、野鳥に餌をやるのを楽しみにしている利用者もいる。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	現在感染症対策上、健康確認が取れた家族や職員以外の不特定の方との交流を制限している。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	ケースに応じて中核症状を見定めながら行動心理症状の分析を話し合い、取り組んでいる。	/	/	/	法人・事業所として、認知症ケアの技法である「ユマニチュード」を活用した利用者とのコミュニケーションなどを実践しており、職員は研修等で学び、認知症状などを理解している。また、日々の生活動作の中で、職員は利用者一人ひとりの残存能力を見極めて、歩行や運動のほか、家事や清掃などの生活リハビリを取り入れ、心身機能の維持に努めている。さらに、利用者自身でできることは自分でしてもらい、職員は時間がかかっても、見守りや待つ介護に努めている。時には、新人職員が利用者の動きを待たずに、つい手を出して支援してしまうことも見られるため、ベテランの職員がフォローをしながら、時間をかけて見守ることの大切さを伝えている。中には、「自力で排泄がしたい」などの利用者の意向に沿って、家族と話し合いをしながら、職員がベッドにL字柵を取り付けて、居室にポータブルトイレを設置するなどの支援をしたこともある。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	利用者1人ひとりにあわせた機能訓練を実施している。状態に合わせて適切に補助具を利用し「歩ける」期間を少しでも維持できるように取り組んでいる。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	△	本人のできる範囲で手や口を出さず見守っているが、時間(心)の余裕がない。	◎	/	○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	各利用者に応じて役割を設けるように取り組んでいる。	/	/	/	モップがけや洗濯物たたみ、テーブル拭き、調理の手伝い、壁面の飾り付けの作成など、日々の生活の中で、職員は利用者にも声をかけて、役割を担ってもらえるよう支援している。また、職員は利用者が進んで、楽しみながらできる役割を模索するとともに、できる時に洗濯物たたみや清掃などを手伝ってもらえるよう声をかけている。中には、季節の飾り付けを作成する際に、色をぬる利用者があるなど、些細なことでもできる役割や出番づくりにも取り組んでいる。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	△	各利用者のケースに応じて症状に合わせて取り組んでいる。	○	○	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	◎	利用者本人の個性を大事にし、支援している。	/	/	/	起床時に、着替えや髭剃りなどのできることを利用者自身にしてもらい、職員は見守りやできない部分のサポートをしている。また、食べこぼしなどの汚れが見られた場合には、職員が利用者に声をかけ、さりげなくフォローをしている。さらに、常に履物が乾燥した状態を保てるように、職員は手間を惜しまず、上履きなどを手入れするなどの対応をしている。加えて、重度な状態の利用者にも、好みの服のデザインや色などの希望に沿うとともに、家族と相談しながら着脱をしやすい物を選んでもらうなど、本人らしさが保てるよう支援している。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	できるだけ本人の好みに沿って、整えられるように支援している。	/	/	/	
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	時間が許す限り職員が見守り、アドバイスをしながら自己決定の支援を行っている。	/	/	/	
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	◎	その人らしい服装を楽しめるように支援している。	/	/	/	
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくなりカバしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	本人の自尊心を大切にしながら声掛けを行っている。	◎	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	×	現在は感染対策上本人の望むお店に通うことができない。	/	/	/	
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	ケースに応じて本人らしさが保てるように支援している。	/	/	○	
		h	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	食事の一連のプロセスを理解している。	/	/	/	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	食事の一連のプロセスを理解している。	/	/	/	事業所では、管理栄養士が立てた配食サービスを活用して、業者から食材が配達され、ユニット内で炊飯と汁物作り、アレンジした盛り付けを行い、利用者に食事を提供している。利用者には、食器の準備や後片付けなど、できることを手伝ってもらっている。事業所では、干し柿づくりなどをすることもあり、利用者に柿や栗の皮むきなどの下処理を手伝ってもらうなど、職員は利用者から教わることも多い。現在、アレルギーのある利用者はいないが、苦手な食材などがある場合には、代替えの食材を用意するなどの対応をしている。食器類は、入居時に使い慣れた物を持参してもらうほか、利用者の状態に合わせて、事業所で用意した使いやすい物を使用している。年を重ねて、多くの利用者の視力低下が見られ、食器とごはんなどの食材の色が同じになる物は使用せずに、食器は少し重さのある安定して落ち着いた物を使用している。食事の際に、職員が希望すれば、利用者と同じ物を食べることができるものの、コロナ禍の感染対策もあり、職員は見守りやサポートを行い、現在は別々に食事を摂っている。また、利用者の状態に合わせて、刻み食やミキサー食などに対応するとともに、職員はミキサー食などにした後に、もう一度食材の形に作り直すなど、少しでも楽しい食事が美味しく味わえるよう工夫している。さらに、献立や栄養バランスは業者の管理栄養士が管理しているが、事業所では、利用者の嗜好や行事に合わせたメニューの変更などを業者に伝えて対応してもらうこともあり、食事は利用者により好評を得ている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	一部の人に限り調理の下ごしらえに参加、また後片付けに参加している。	/	/	○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	△	感染症もあり積極的に参加できない	/	/	/	
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	利用者の摂取状況を見ながら把握している。アレルギーに関してはフェイスシートを参考にしている。	/	/	/	
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	季節感を感じさせる食材やおやつを手作りして提供している。	/	/	○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	利用者の高齢化に伴い、食事形態は本人の健康状態に合わせた工夫をしている。	/	/	/	
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	個人で使いやすいものを使用している。	/	/	◎	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	ペースや食べ方または混乱に対してのサポートはしている。現在、感染対策として職員と一緒に食事摂取することは中止している。	/	/	○	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	△	配色サービスを利用しているが、一部手作りで食事を加えている。	◎	/	○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	定期的な血液検査を行い栄養バランスの把握を行っている。	/	/	/	
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	個人のペースに合わせてながら栄養摂取や水分補給に努めている。	/	/	/	
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	多職種に意見を聞きながら対応している。	/	/	○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	感染対策として日常的に消毒作業を行っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	訪問歯科の指導を受けながら口腔ケアの必要性、重要性の理解に努めている。				歯科医等から指導やアドバイスをもらい、職員は口腔ケアの重要性を理解している。毎食後に、職員は利用者へ声をかけ、口腔ケアを実施している。必要に応じて、職員は見守りや磨き残しなどのサポートをしている。自分で歯磨きをしている利用者を含めて、職員は全ての利用者の口腔内の様子の確認に努めている。また、訪問歯科などの受診の際に、歯科医から口腔内の状況や気づいたこと、指導などのアドバイスをもらい、職員は必ず記録を残している。さらに、歯ぐきの腫れや義歯の不調などが見られた場合のほか、利用者から訴えがあった場合には、早期の歯科受診や往診に繋げている。	
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	◎	口腔ケアに際し各個人の口腔内の健康状態を把握している。			◎		
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	不適切ながらも訪問歯科の利用時に積極的に指導を受けている。					
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	訪問歯科の指導のもと手入れ方法を理解し、利用者が適切に行えるようサポートしている。					
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	◎	1人ひとりに声掛けをしながら見守りや介助を行い、本人の口腔内の健康状態の把握に努めている。					○
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	排泄ケアの与える影響は理解している。				事業所では、利用者がトイレで排泄することを基本として、身体状況が可能な限り、トイレでの排泄支援に努めている。職員は、利用者一人ひとりの排泄パターンを把握し、声かけやトイレ誘導を行うことで、失敗のない排泄支援に取り組んでいる。また、重度の利用者にも、必ず1日1回はトイレ誘導を行い、トイレで排泄できるよう支援している。さらに、紙パンツやパッドなどの排泄用品を使用する場合には、利用者の状態に合わせて、適切な排泄用品を話し合うとともに、利用者や家族の費用的な負担にもなるため、メーカーに問い合わせをしながら、家族等に確認の上で使用している。	
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	原因と影響について多職種を交え相談し理解に努めている。					
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	職員間で理解している。(排便スケール使用)					
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	1人ひとりの状態や現状を見直しして支援している。		◎			○
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	多職種連携を取りながら話し合い、要因を考えながら支援している。					
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	個人のペースを把握し時間等を個々に設定し対応している。					
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	本人の状態や排泄パターン(兆候)を考えながら使用している。					
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	◎	個別の状態に合わせて使い分けている					
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	乳酸菌飲料の摂取を取り入れ、毎日の運動(ラジオ体操)をしている。					
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	△	個々の習慣や希望には至っていない。本人の意思を確認しながら取り組んでいる。			◎	○	週2~3回、夕方の時間帯を活用して、利用者が入浴できるよう支援している。また、利用者の希望に応じて、入浴の順番や長さ、湯の温度など、職員は柔軟な調整や対応をしている。さらに、冬至の日にはゆず湯をするなど、利用者が心地良く、ゆったりとした入浴時間が感じられるような工夫をしている。加えて、家族は利用者が寛ぎながら、満足して気持ち良く入浴できるように、安心をしている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	○	本人のペースに併せながらなるべく寛げる環境になれるように支援している。					
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	安全面を考慮しながら適切に器具(シャワーチェア、手すり)を使用し、支援している。					
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	本人の理解を得られるように工夫したり、声掛けに取り組んでいる。					
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	個々に応じてバイタル測定を実施し、状態把握に努めている。					

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	巡回時間を中心に状態把握に努め、職員間で情報を共有し取り組んでいる。	/	/	/	事業所には、医師の指示により眠剤などを服薬している利用者もいる。職員は、利用者一人ひとりに生活リズムに合わせて昼間の離床を促したり、日中の散歩や体操などの活動を増やしたりするなど、利用者が夜間に良眠できるよう支援している。また、夜間の眠れる環境やタイミングは、利用者一人ひとりが異なっていることもあり、職員の日々の観察力を活かしながら、上手な声かけや過ごし方を工夫するなどの支援が行われている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	原因は探れていないが、リズムを整える工夫や取り組みは行っている。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	ケアプランに基づき、支援内容などを職員間で検討し、医師とも相談している。	/	/	○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	個室の環境下でプライバシーが保たれ、心身を休養できる環境を整えている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	個別ではあるが、携帯電話を持っていたりリモート面会や葉書でのやり取りをしている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	本人からの希望の際には手助けをしながら支援している。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	電話の対応はないが、個人の携帯所持は認めている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのまませず音信がとれるように工夫している。	○	直接本人へ渡し、個別の対応を行っている。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	適宜家族に対しては個別に協力の依頼は行っている。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	×	本人がお金を所持することの大切さは理解しているが、事業所としては個人の金銭所持は行っていない。	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	現在は行っていない。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	×	家族へは事業所の意向を伝えうえで入居契約を行っている。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	×	金銭の所持がないため行っていない。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	×	所持できないというルールを入居の際に家族へ説明している。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	個々のニーズに対応して一定のルールの中で柔軟な支援に取り組んでいる。	◎	/	○	コロナ禍において、事業所には外出や面会などの制限が設けられているものの、感染状況を見計らいながら、感染対策を徹底した上で、利用者や家族から外出などの要望が出された場合には、柔軟に対応をしている。また、職員が病院受診の同行支援をすることもある。さらに、家族から、「面会ができない中で、利用者の日々の様子が分かりにくい」という要望が聞かれ、職員は利用者個人の写真集を作成して、送付するなどの対応もしている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	気軽に来棟できるように玄関回りは清潔に保たれているが、現在はユニット自体への入棟は禁止している。	◎	◎	◎	事業所周辺はのどかな風景が広がっているほか、門を入ると平屋の建物が立ち並び、ベンチも置かれ、居心地の良さを感じる。また、毎日利用者が玄関周りの清掃をするほか、ガーデニングの得意な職員が、庭や花壇の整備を行い、夏にはひまわりやホウキ草、冬には水仙などが植えられ、親しみやすさがある。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に季節向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない寂風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	○	安全面には配慮しながら適度な飾り付けにならないよう取り組んでいる。季節感を取り入れた飾り付けを行っている。	◎	○	○	リビングには、写真やカレンダー、季節感のある飾り付けが行われているほか、窓から四季折々の風景も眺められ、利用者や来訪者は季節を感じることができる。窓の多い事業所内は明るく、天窓も設置され、自然の採光も差し込んでいる。また、利用者はソファなどに腰をかけるながら、自由に寛ぐことができる。毎日、利用者と一緒に広いリビングなどの清掃や消毒などを行い、物を足もとに極力置かず、清潔な快適な空間づくりが行われている。	
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	毎日掃除をし、また汚れた際にはその都度掃除を行っている。	/	/	/		◎
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	季節感を得られるように工夫しながら飾り付けを作成している。	/	/	/		◎
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	共有のリビング環境と個室とのバランスを良くできるよう調整を行っている。	/	/	/		/
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	◎	個々の状態に合わせて衣類などを居室に置き、居心地よく過ごせる環境を提供している。	◎	/	◎	居室には、エアコンとベッドが備え付けられている。また、利用者や家族と相談を行い、家具や生活用品を持ち込むこともできる。さらに、愛読書を持ち込んだり、家族の写真を壁に飾ったり、賞状を置いている利用者があるなど、職員は利用者一人ひとりに合わせた快適な空間づくりを支援している。	
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	棟内には手すりが設置されている。各居室にトイレと洗面所があり、なるべく自立した生活が送れるよう配慮に努めている。	/	/	/	○ 浴室の入り口には暖簾を吊るしたり、居室の入り口には、大きく名前を表示したりするなど、利用者が迷わず、生活を送れるよう支援している。1ユニットのみ、居室内にトイレと洗面台が備え付けられ、生活を送りやすい空間づくりも行われている。また、事業所内で迷い、居室を間違える利用者にも、職員は傷つけないように、さりげなく誘導するなどの対応をしている。	
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	危険物を除き生活空間内でさりげなく設置している。	/	/	/		
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけることができない状態に暮らしていること、異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	◎	職員一人ひとりが鍵に対する弊害に対して理解している。	◎	◎	◎	職員は研修等で学び、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。日中に、事業所では玄関の施錠をしておらず、夜間のみ防犯のため、施錠をしている。中には、帰宅願望のある利用者が、屋外に出ることもあるが、職員は利用者につき添うとともに、事業所周辺を散策したり、別の職員がちょうど車で出会うように声をかけて、ドライブしながら事業所まで帰ったりするなど、利用者を制止しないような支援を心掛けている。	
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	入居時及び家族へは説明し、理解が得られるよう働きかけている。	/	/	/		
(4) 健康を維持するための支援										
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	◎	フェイスシートや家族からの情報収集を行い、職員間で把握に努めている。	/	/	/		
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	日々のバイタル測定、入浴、清拭の際に体の変化の観察に努めている。	/	/	/		
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等いつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	看護師や管理医師と常に連携を取りながら早期対応ができるように努めている。	/	/	/		
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	家族の協力を得ながらなるべく希望する医療機関への連携に努めている。	◎	/	/		
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	本人及び家族の意向を尊重しながら適切な医療へ繋がるように支援している。	/	/	/		
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	むつみの家での受診希望の家族もいるが、情報は常に共有しながら家族への合意を得ている。	/	/	/		

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	医療機関と連携し、フェイスシートを活用しながら情報提供に努めている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	協力医療機関との連携は適宜行っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	常駐の看護師へ申し送りを行い相談支持を仰いでいる。また、症状によって管理医師に直接連絡をとり、報告や指示をもらっている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	常に看護師と母体病院で連携し相談できる体制をとれている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	毎日のバイタル測定や状態に応じて観察項目を調整し以上の早期発見に努めている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	薬については説明書、研修などを受けて理解している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	一定のルールを決めて取り組んでいる。服薬時には名前を復唱し出来る限り2名での確認を行っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	服薬の調整時には、副作用の有無や体調の変化に注意しながら取り組んでいる。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	終末期に関しては、事業所として見取りは行わないことを事前に説明し了承を得ている。状態変化時は都度家族へ報告し、状況に応じて意向を確認する。				事業所には、「利用者が重度化した場合における対応に係る指針」があり、入居時に、職員は利用者や家族に対応できることを説明している。また、事業所では看取り支援を行っており、入居の際にも説明をしている。さらに、利用者の状態が重度化した場合には、家族や医師を交えて関係者で話し合い、方針を共有している。加えて、法人・事業所として、転院などの相談支援体制が整備され、事業所が対応できなくなった場合に、利用者は病院や系列の特別養護老人ホームなどに転院をしている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	終末期に際しては、職員、看護師、管理医師、家族が話し合い方針を共有している。	◎		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	一定の医療処置が発生した際をベースに終末期への意向を判断し、支援の見極めを行っている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	入居時には書面を通して説明を行い、理解を求めている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々より良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	△	管理医師やかかりつけ医との医療連携を行いながら終末期の適応できる施設や病院の移行を支援している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	家族からの話には積極的に耳を傾け、心理的支援に取り組んでいる。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	母体病院における年2回の感染研修へ全員参加し、定期的に学んでいる。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	母体病院の定める感染マニュアルに沿って対応し、研修の時には手技の訓練を行い体制を整えている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	◎	行政からの通知・インターネット・母体病院の感染委員会に参加し、様々な情報を共有している。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	新型コロナウイルス感染症対策として徹底した手洗い、手指消毒を実施している。面会等は感染状況を見ながら対応している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	家族の声に耳を傾けながら一緒に考えられる関係を目指している。	/	/	/	コロナ禍以前は、家族に敬老会などの行事案内を送付して、多くの家族に参加協力してもらうこともできていたが、現在は開催を自粛している。コロナ禍において、事業所には面会などの制限が設けられ、家族が来訪できる機会は減少しているものの、窓越しの面会に対応するほか、SNSのLINE機能を活用して、オンライン面会にも対応している。また、地域の感染状況を見計らいながら、利用者や家族から要望が出された場合には、抗原検査した上で、外出するなどの対応をすることもある。利用者毎の担当職員が、来訪時や電話連絡時を活用して、家族に利用者の様子を伝えるとともに、必需品や希望の品の買い物をお願いすることもある。さらに、敬老会や誕生会などの行事は、年4回発行する「むつみ新聞」を活用して、様子を伝えている。加えて、人事異動等で担当職員が変わる場合には、個別に家族に連絡をしている。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	×	新型コロナウイルス感染症流行のため行っていない。	○	/	△	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	△	担当者を窓口にし、近況報告等は伝わっているが、行事等の録画、写真の送付等できていない。	◎	/	○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	より良い関係を築いていけるように支援出来ている。認知症への理解に対しては今の状態を伝えたり、管理者を含めたカンファレンスを行っている。	/	/	/	
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	運営上の事柄や出来事については文章で送付している。	/	○	○	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	◎	リスクの説明はその都度行い、利用者の現状を共有できるように努めている。	/	/	/	
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	◎	気軽に相談できる関係を作るため日ごろからコミュニケーションを図り、信頼関係の構築を目指している。	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	入居時、退去の際には管理者から説明を行い、理解が得られるように取り組んでいる。	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	退去に関しては、その過程を明確に説明を行い、納得のいく退去先に移れるように支援している。	/	/	/	
III. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域、事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	自治会近隣の学校や保育園との交を交流を持ちながら理解を図っている。	/	○	/	事業所として自治会に入会し、ごみ当番や地域清掃などに協力をしている。以前には、利用者を探すために、町内放送で呼びかけの協力をしてもらうなど、地域との連携を図ることができている。また、可能な範囲で自治会行事や会合に参加協力しているものの、コロナ禍において、参加できる行事等が縮小されるとともに、自治会長の交代があり、以前に比べて連携が難しい状況となっている。さらに、職員等は近隣住民に挨拶を欠かさず行うなどの連携を図ることを継続している。コロナ禍の収束後は、地域活動や行事へ利用者と一緒に参加するなど、管理者は、「改めて地域の事業所として関係を深めていきたい」と考えている。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	◎	自治会に入会し、行事等への参加や地域の方との日常的なあいさつをすることを声掛けて行っている。	/	○	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	周知はされているが、支援者の増加には至っていない。	/	/	/	
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	△	行事や案内に際するときのみ来棲している。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りつらうなど、日常的なおつきあいをしている。	△	日常的なあいさつは実施できているが、気軽に立ち寄れる関係性は構築できていない。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	ボランティア活動に関しては一部協力を得ながら支援して頂いている。	/	/	/	
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	△	利用室や教育施設に関して、関係性を保ちながら取り組んでいるが、感染状況を踏まえて交流はできていない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	△	文章にて案内していたが、参加率は高い。感染状況から文章報告は行っている。	○	/	○	コロナ禍において、運営推進会議は全て書面開催となっている。書類を会議の参加メンバーや全ての家族に送付するとともに、返信用封筒を同封して意見を返信してもらうなど、事業所として一方的な発信とならないよう心掛けている。また、返信された意見を議事録として取りまとめ、回答をするなどの対応を行い、再度会議の参加メンバーに報告をしている。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	利用者サービスの実際を写真を交えて報告していたが、文章にての報告になっている。家族からの意見や思いをサービス向上に繋げられるよう取り組んでいく。	/	○	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	日時設定を適宜調整しているが、参加率に繋がっていない。	/	○	/	
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	共通認識を持ち日常的に取り組んでいる。	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	×	家族や利用者、地域の方の十分な理解には繋がっていない。	○	○	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	個人の能力を見ながら力量に合わせて研修を実施している	/	/	/	医師である法人の代表者は、月2回利用者の往診を兼ねて事業所に来訪があり、利用者や職員の様子を気にかけて、職員から話を聞くこともできている。また、管理者を通して、法人本部に職員の意見を伝えることもできる。さらに、職員は法人内研修を受講するとともに、勤務調整をして県地域密着型サービス協会の外部研修を受講できるようにするなど、職員のスキルアップに努めている。コロナ禍以前は、親睦会などの職員同士の交流を図ることができていたものの、現在は開催が自粛されている。加えて、定期的に管理者は、職員との個別面談を実施して、職員から意見を聞くとともに、職員のストレスチェックを実施して、適切な対応をとるなど、職員の意見を取り入れながら、働きやすい職場環境づくりに努めている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるように取り組んでいる。	○	なかなか計画的にOJTは行っていないが、都度ケースに応じて訓練学習機会を作っている	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	法人全体のバランスを取りながら個々の成果と実績を報告し取り組んでいる	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	今年度は、zoomの研修へ積極的に参加し研修参加率は上がっている。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	法人では、ストレスケアチェックを行い産業医の評価をうけ、適宜面談を行っている	◎	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	○	高齢者虐待防止法についての研修へ参加しながら、虐待に関する知識の習得に努めている。	/	/	○	法人として、虐待防止などのマニュアルを整備するとともに、重点的に倫理や虐待防止に取り組んでおり、年2回法人内研修で職員は学び、理解をしている。管理者は、部署会などの機会を活用して、虐待や不適切な言動が行われないように繰り返して啓発を行い、職員への注意喚起をしている。さらに、不適切な行為を発見した場合には、管理者へ報告するとともに、臨時のミーティングを実施して、話し合いなどの対応をしている。加えて、事業所として、虐待防止委員会を立ち上げて、月1回話し合いをするなど、職員が意識した適切な対応が行われるよう取り組んでいる。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	朝の申し送りを中心に管理者も話し合いに参加している。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	△	できる限り、ユニット内で声をかけて回り、一人ひとりの状況把握に努めている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	身体拘束廃止委員会があり、年2回研修を行っている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	○	不明な点は、委員会に相談を仰ぐようにしている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	ご家族からそのような要望はないが、その都度家族へは状況を報告し、理解を図っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解し、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	△	職員全体的に成年後見制度は説明する事は出来ないが、管理者や一部職員は相談の支援にも対応している。	/	/	/	
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	必要な制度が利用できるよう専門機関との連携を大切に取り組んでいる。	/	/	/	
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	△	基本的対応は、示しているが、個別のケースに対して管理者や看護師の指示を仰いでいる	/	/	/	
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	ケースに応じて、応急手当の指示は看護師が指示を出している。定期的な訓練には至っていない。	/	/	/	
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	◎	事故報告書やヒヤリハット報告書(インシデントレポート)は都度作成し、職員間で共有して再発防止に努めている。	/	/	/	
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	◎	各職員と管理者が都度話し合い事故防止に取り組んでいる。	/	/	/	
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	対応マニュアルは作成しているが、周知には至っていない。	/	/	/	
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	上司へ報告を行い、速やかに対応している。	/	/	/	
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情が発生した際には、速やかな対応を心掛けている。前向きな話が行えるよう、普段からコミュニケーションを取っている。	/	/	/	
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	運営推進会議議事録などを通して家族の個別的な要望を聞く機会としている。また、同法人の中でも窓口があり相談に乗ってもらっている。	○	/	○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞くほか、要望を察知して、可能な範囲で対応をしている。家族からは、来訪時や電話連絡時を活用して、利用者毎の担当職員が個別に意見を聞き、対応をしている。また、管理者は、職員から意見を聞くとともに、部署会や管理者との個別面談を通して、職員は運営に対する意見を伝えることもできる。出された意見は、必要に応じて、法人本部に伝えられるとともに、サービスの質の向上に繋げている。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	なるべく、機会を作りながら相談に応じている	/	/	/	
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	◎	月に2回は、ホームを来所し職員の意見を聞く機会を取っている。	/	/	/	
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	職員一人ひとりの意見や提案等を聞くよう心掛け、定期的に話し合いの機会を設定している。	/	/	○	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	△	なかなか意識的に話し合いの機会は取れていない	/	/	/	外部評価の自己評価は、職員の意見を踏まえて、ユニット毎に作成をしている。また、サービスの評価結果は部署会などを活用して、職員に報告するとともに、目標達成に向けて取り組んでいる。さらに、運営推進会議を活用して、評価結果や目標達成計画等の報告をしている。コロナ禍の収束後には、目標達成計画の取組み状況のモニターを会議の参加メンバーや家族に呼びかけて、意見をもらうなど、サービスの質の向上に繋げられることが期待される。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	△	計画の作成は行えるが評価に至っていない	/	/	/	
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	評価結果は、家族へ伝えているが今後の取り組みに生かせていない	○	○	○	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	運営推進会議での議題に乗せてはなかった。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	△	火災対応マニュアルは作成しているがそれ以外は具体的に作成に至っていない	/	/	/	法人・事業所として、火災対応マニュアルなどを整備するとともに、年2回様々な場면을想定した避難訓練を実施している。また、市行政から事業所は福祉避難所に指定され、食料や水などの備蓄品を確保するとともに、十分な協議が行われ、連携を図ることができている。コロナ禍において、地域との繋がりが希薄になりつつあることから、自治会等との密な連携を行うなど、より一層の地域住民との連携協力体制を整え、さらなる利用者の安全確保の充実が図られることを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	年2回避難訓練を実施し取り組んでいる	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	消火設備点検は定期的に実施している。非常食に関しては母体病院のほうで備蓄し管理している。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地域の消防署と連絡を取り話し合う機会は設けているが、明確な協力支援体制の構築には至っていない。	○	○	○	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	△	自治会などと話し合いは行っているが、合同訓練には至っていない。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	コロナ禍の為、集団や地域の方の交流や情報発信には至っていない	/	/	/	事業所には、相談に訪れる地域住民がおり、快く対応をしている。事業所として、困りごとが発生した場合には、市行政や他のグループホームなどと連携を図るなど、良好な関係を築くことができている。また、市行政から、介護サービス相談員を受け入れるなどの対応もしている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	△	直接、ホームへ尋ねてきたりする場合は、臨機応変に相談支援に応じている	/	○	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	地域活動の場として活用はできていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	現在人材研修の受け入れは行っていない。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	△	法人の医療機関と連携を行い、一部地域ボランティアに参加している。	/	/	○	